

憐れみと祈りの霊を

ゼカリヤ書 12：8－10， 13：1



司祭 ヨハネ 井田 泉

聖霊降臨後第2主日

2025年6月22日

京都聖三一教会にて

日本聖公会では今日から1週間が「沖縄週間」と定められており、1 昨日から今日までの3日間「沖縄の旅」が実施されています。80年前の1945年6月23日に、沖縄守備軍の司令官であった牛島満中将らが自決して日本軍の組織的な戦闘が終結したとして、明日6月23日が「沖縄慰霊の日」とされたことから、日本聖公会でもこの時期に「沖縄週間」が定められました。沖縄戦での死者は20万人を越え、なかでも民間人の死者がその半数近く、当時の住民の四分の一に及ぶと言われます。

沖縄教区にはすでに退職されましたが、石原絹子司祭という方がおられます。石原先生はまだ10代の頃、沖縄戦の爆撃の中を逃げまどううちに、お母さんを、そして弟も妹も亡くされた。沖縄戦の痛ましい事実を伝える語り部となって、長く平和のために活動してこられました。大切な存在です。

ところが今日の国際情勢に対応するとして、日本は今、大規模な軍備拡張を行っています。とりわけ最も平和を願ってきたはずの沖縄に軍事施設が次々に増強されている現実があります。

わたしは5月に北関東教区の日静想日に招かれて栃木県のおやま小山の祈りの家に行ってきたのですが、その機会に佐野市郷土博物館というところを訪ねました。足尾銅山の鉱毒によって田畑を失い、生活を失い、命を脅かされた農民漁民のために、自分の命をかけた田中正造の遺品がそこに展示されていました。

彼が残した遺品の頭陀袋があり、そこに入っていた小石と、憲法とマタイ福音書を綴り合わせたものなどを見ました。彼は聖書を頼りに生きていたのです。また展示の中に彼の日記の一節が掲げてありました。

「静岡県掛川をはじめ東京、栃木において軍備全廃を述べたり」

日清戦争のあと、日露戦争の前の時期に、「世界海陸軍を全廃すべし」と彼は訴えた。そんな非現実的なことを、と彼は笑いものにされたかもしれません。けれども旧約聖書の預言者イザヤは、ユダ王国の戦争準備を批判し、軍事同盟に強力に反対しました。そのために口を封じられることになりました。預言者イザヤは田中正造に通じ、またそれは日本国憲法の平和主義に通じています。「非現実的なこと」として軽んじるのではなく、平和の理想をしっかりと掲げて、それに一步でも半歩でも近づこう、近づけようとするのが、信仰者の姿勢です。

さて今日、ご一緒に心にとめたいのは先ほど読まれた旧約聖書・ゼカリヤ書の1節です。

「わたしはダビデの家とエルサレムの住民に、憐れみと祈りの霊を注ぐ。彼らは、彼ら自らが刺し貫いた者であるわたしを見つめ、独り子を失ったように嘆き、初子の死を悲しむように悲しむ。」12:10

これはどういう時代背景があったのか。また「刺し貫いた者」とは何を指しているのか。いろんな研究者が論じていますが、

結局のところはよく分からない。けれどもわたしたちはここから何かを受けとめたい。預言者ザカリヤは当時の困難の中で、神の言葉を受けてそれを人々に伝えようと切に願ったに違いないからです。

「わたしはダビデの家とエルサレムの住民に、憐れみと祈りの霊を注ぐ。」

「わたしは……憐れみと祈りの霊を注ぐ」と神が約束し、それを実行しようとしておられます。神さまが「霊を注ぐ」と言われるのは、現実がその反対だからです。霊が枯渇している。生きて歩む元気がなくなって衰弱している。祈り活動することの源となる力が枯渇している。あまりに多く失望し、体も精神も疲れ果ててしまった。こういう現実を神がご覧になって、心を痛み、憐れみを発せられて言われた。

「わたしはその人々に、わたしはあなたがたに、憐れみと祈りの霊を注ぐ。」

ここで注意しておきたいのは、「憐れみ」と「祈りの霊」ではなく、憐れみと祈りの両方に「霊」がかかっていることです。神が注がれる霊は、憐れみと祈りの両方を含み、両方が一体となった霊です (a spirit of compassion and supplication)。

「祈り」と訳された言葉は「嘆願」という強い切実な祈り求めを意味します。

「わたしは……憐れみと祈りの霊を注ぐ」

この神の約束が決定的に現実となった場面の一つは、イエスの洗礼です。イエスがヨルダン川で洗礼を受けられたとき、天が裂けて聖霊が鳩のようにイエスの上に降った。神の憐れみと祈りの霊がイエスに宿りました。イエスは神の憐れみに動かされ、人を生かすことを願って切に祈りつつ働かれました。

今日の福音書の初めにこう言われていました。

「イエスがひとりで祈っておられたとき、弟子たちは共にいた。」ルカ 9:18

イエスはしばしば祈っておられたことがルカ福音書に記されています。イエスは祈っておられる。そのそばにいる弟子たちも影響を受けます。イエスから祈りの影響を受ける。霊が働くのです。

神の約束が現実となった第2の場面は、聖霊降臨日です。一つになって集まっていた祈りの群れに、憐れみと祈りの霊が注がれて教会が誕生しました。伝道も教会の形成も信徒の交わりも、憐れみと祈りの霊が人々に宿り、その霊が働いて実現していったのです。それぞれの教会の原点には、出発点には、神から受けた憐れみと祈りの霊の働きがあったはずです。

そして第3に、わたしたちも神さまから憐れみと祈りの霊を受けました。神の霊の働きは自由であって、時と場所、人間の計

画や予想に限定されません。けれどもやはり時と場所は大切です。わたしたちは洗礼と堅信において、神さまから憐れみと祈りの霊を受けた。それはわたしたち一人ひとりに宿っています。

今のわたしたちの悩みは、いただいたはずの憐れみと祈りの霊が、教会においてもわたしたち一人ひとりにおいても、感じられなくなっている、経験しにくくなっていることではないでしょうか。

ところで「憐れみと祈りの霊」を注ぐと約束をされた神は、その続きにこう言われました。

「彼らは、彼ら自らが刺し貫いた者であるわたしを見つめ、独り子を失ったように嘆き、初子の死を悲しむように悲しむ。」

「彼ら」というのは「憐れみと祈りの霊」を受けた者です。
「彼らは、彼ら自らが刺し貫いた者であるわたしを見つめ」
彼らはわたしを刺し貫いた、と言われる。神は人間によって、ご自身が創造し祝福されたはずの人間たちによって、刺し貫かれるほどの苦しみを味わっておられる。神が願われたこととまったく正反対のことがこの世界を覆っているからです。けれども神の痛みと苦しみを彼らはまったく気づかずにいた。けれども、憐れみと祈りの霊を受けたとき、わたしたちは神をはっきり見つめる。痛まれる神を見つめる。十字架のイエス・キリストを見つめる。わたしたちに深い嘆きと悲しみ、^{ざんげ}懺悔の思いが起こります。

けれども神の霊を受けたことによって起こる嘆きと悲しみは、わたしたちを新しく生かします。「憐れみと祈りの霊」はわたしたちを悲しみや失望にうずくまらせず、そこから立ち上がらせる。わたしたちはその霊を受けて、自ら憐れむ者、祈る者として歩ませられるのです。

今日のゼカリヤ書の締めくくりの言葉を読みましょう。

「その日、ダビデの家とエルサレムの住民のために、罪と汚れを洗い清める一つの泉が開かれる。」 13:1

罪と汚れを洗い清める泉。イエス・キリストという泉がわたしたちのために開かれる。

沖縄教区に「愛楽園祈りの家教会」という教会があります。現在は国立療養所になっています。元ハンセン病患者の青木恵哉という方によって開かれた療養所で、その中にある聖公会の教会です。わたしがまだ若かった 30 代の頃、学生たちと一緒に 1 週間ほどそこで過ごしたことがありました。その時の鮮明な記憶を一つだけお話しします。ハンセン病の元患者さんたちとお会いしました。鼻がなかったり、目が見えなかったり、それぞれに不自由を抱えておられます。差別と偏見にさらされて、非常な苦勞を負ってこられた方々です。その方々がわたしたちを非常に歓迎してくださった。そのとき、口々に言われた。「わた

しはこの病になったおかげでイエスさまを知ることができた。それが何よりも幸せです」と。非常な衝撃を受けました。これがほんとうの信仰であると。

その愛楽園は沖縄県名護市の^{すむい}で済井出という所にあります。澄んだ泉が湧く所、という意味ではないでしょうか。そこにあのザカリヤが言った「一つの泉」が開かれた。信仰の群れができて、かつては100名を越す会衆で溢れていた。その教会は愛楽園**祈りの家**教会というのです。「憐れみと祈りの霊」が働いたひとつの尊いしるしです。

ゼカリヤ書に記された言葉は空しいものではなく、このようにして実現してきました。これからも、憐れみと祈りの霊が働き続けてくださいますように。

お祈りします。

神さま、どうかわたしたちに憐れみと祈りの霊を新しく注いでください。たとえわたしたちが悲しみや失望を抱えていたとしても、その霊によってわたしたちを力づけ、新しく平和に向けて歩み出させてくださいます。主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン